The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際”がんの予防と発見”シンポジウムに参加して
Author(s)	藤田, 昌英
Citation	癌と人. 1985, 12, p. 12-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国際“がんの予防と発見”シンポジウムに参加して

藤　田　昌　英*

第6回目のシンポジウムが昭和59年11月末オーストリアのウィーンで開かれ，教室からは太田潤先生が乳癌の，私が大腸癌の集団検診の成績をもって参加しました。この学会は隔年に開かれており，今回は世界約30カ国から約700名が参加して，440余りの演題発表が行われました。表題が示すように，この学会での発表は，がんの予防と早期発見に関するものに2大別されており，治療に関するものはありません。

一次予防

がんの予防は，一次予防と二次予防に分けられます。一次予防とは，本来の予防であり，それぞれのがんについて，その原因を探り，明らかになった原因構造（**図1**）を人間から遠ざけることによって，がんの発生率そのものを下げようとするものです。ところが，正直なところほとんどのがんの本当の原因構造はいまだに不明な点が多いのです。胃がんや大腸がんなどの消化器のがんは食物と関係が深いことがわかって来ています。大腸がんは動物性脂防の摂取量と正の相関，繊維分摂取量と急の相関があることが国ごとの発生率の比較データーから明らかになっています。しかし，この事を人々に周知させても，ただちに長い間の食習慣を変えることは不可能に近いことですので，こと大腸がんに関しては，その一次予防は悲観的です。

肺がん

ところで一次予防がかなり有効で可能ながんがあります。それは肺がんであり，その密接な原因構造は**喫煙**です。今回のシンポジウムでも，大きなテーマとして“肺がんとタバコ”がとり上げられ，多くの国からの発表と熱心な討論が行われました。欧米の先進国では，政府レベル，地域団体，協会などによる啓蒙活動がかなり功を奏し，社会生活における喫煙のマナーの改善とともに，高年令層に限れば喫煙人口の低下がみられています。アメリカでは医師会が卒先して禁煙運動をし，現在ではタバコを喫う医者は社会から葬られる程の徹底ぶりです。そして一次予防の効果が統計的にもがん発生率の

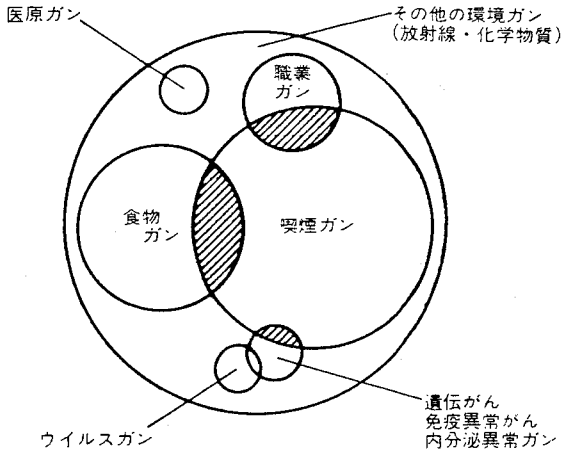


図1　人ガンの原因の構造（平山　雄）

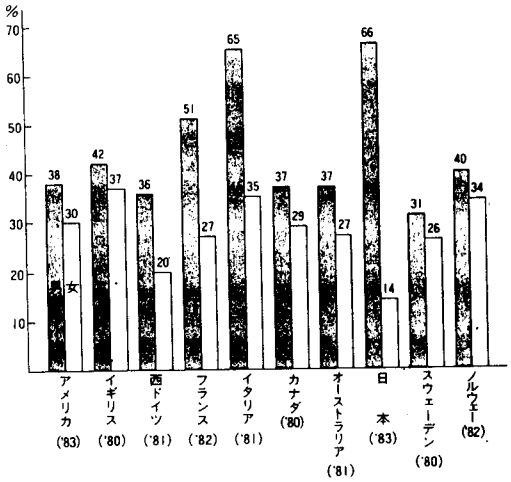


図2　各国の喫煙者率（平山，大島）

* 大阪大学講師，微生物病研究所附属病院外科

増加のにぶりとして出はじめています。政府レベルの運動はいわゆる開発途上国でもかなり盛んで，この点では日本はとてもお世辞にも先進国とは言えず(**図2**)，国際学会でも肩身の狭い思いをしました。タバコは肺がんばかりでなく，循環器病とも関係が深いものですから，怠慢な政府の施策に頼ることなく，禁煙運動を地道な地域団体における健康増進活動として認識し，いわゆる草の根運動的にその輪を広げていくのが早道ではないでしょうか。以上，一次予防について述べましたが，この分野はがんの原因構造や発癌機構などを探る基礎医学の発展とともに除々に進むもので，急激な進展は望めそうにありません。その点，方向づけと努力次第で，今すぐ“がん死亡の減少”に役立つのが二次予防です。

二次予防

これは厳密な意味ではがんの予防ではありませんが，現在の医学で明らかになっている診断法を，がんを自覚していない一見健康な人びとに実施して早期のがんを発見し，手術することにより，がんによる死亡率を下げようとするものです。2，3のがんで行われているいわゆる**集団検診**が二次予防にあたります。しかし，どんながんにも二次予防が考えられるかというとそうでもありません。備えるべき条件として，そのがんの発生率がかなり高いこと，そのがんを大集団から比較的簡単な検査で拾い出せる（診断）方法が確立していること，などが必要で1人のがんを見つけるのに何千万円もかかるのでは，とても実施に移せません。

胃がん

ご存知のように日本は世界中でも最も胃癌の多い国です。かつてはがんで死亡する人の半分は胃癌で占められていました。ところが，数年前から胃癌が減り始めました（今でも第1位であることに変りはありませんが)。その原因には，自然の成り行きによる部分と人為的な努力による部分の2つが考えられます。

第一の部分は，もし意識して行ったとすれば将に一次予防ですが，戦後の日本人の食習慣の変化が2～30年を経て効果を示し始めたのです。振り返ってみると，戦前の食事（中でも塩蔵の干魚など）が胃癌発生を促進するものであったことによります。第2の部分が本題の二次予防の効果です。昭和30年代の半ばから先駆者が精力的に始め，全国規模で今日まで続けて来た努力の結果が現れ始めたのです。シンポジウムの胃癌の部は，胃集検の間接胃X線検査法を編み出された草分けの一人でもある国立がんセンター市川病院長の司会で行われました。もちろん検診の質量とも抜群の日本ですから，議論も日本の独断場でした。諸外国は，こと胃癌に関する限り学ぶことに終始しています。ところで，現在日本で年間行われている集検数は約300万人と頭打ちです。本当に2次予防の効果を期待するには少な過ぎます。そこで，政府の重い腰をもち上げる努力が長年，関係者によって行われた末，やっと実ったのが，老健法で，国の補助をえて各市町村は住民健診の一部に胃のX線検査を盛り込み実施し始めました。もっとも，具体的な取り組みには遅れや問題点も多く，国の目ざす胃検診対象人口の35%とはほど遠い低い実施率にとどまっています。近い将来，この胃癌二次予防が軌道に乗ることと期待していますが，その時こそ，胃癌が死因第一位の座を下りる日であろうと思います。

大腸がん

最近わが国で大腸がんの増加ぶりが注目されています。西ヨーロッパ，北米，オーストラリア，ニュージーランドではこの病気は以前から多く，丁度牛乳や肉の消費量の多さと相関しています。したがって欧米では，この病気の二次予防の試みが数多く行われています。幸い大腸がんは初期から腸の中に出血しているものが多く，鋭敏な反応試験紙で調べると便の中に血がわずかでも出ておれば見つけ出せるので，便潜血反応を利用した集団検診が可能です。

今度のシンポジウムでは，大腸がんの集団検診の発表は西ドイツ，ベルギーと私どもの3題がありました。西欧では多くはヘモカルトという潜血スライドを3日法で使い，大腸がんをスクリーニングする方法が行われ，有用であると

表1　教室における大腸癌集検法とその成績

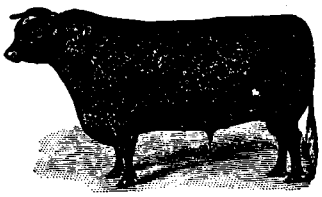
スクリーニング法	受検者例数	要精検率	大腸癌 例数	大腸癌 発見率(補正値)	大腸癌 早期癌(率)	偽陽性	動員力
1. 直腸鏡法 (～S. 53. 3)	16	0	0	0		少	不良
2. 潜血スライド2段階法(非制限→制限) (S. 53. 4～S. 55. 3)	12,898	3.9	3	0.02 (0.04)	1 (33)	やや少	良
3. 潜血スライド2枚法(制限) (S. 55. 4～S. 57. 3)	9,449	14.8	11	0.12 (0.19)	8 (73)	やや多	やや良
4. 潜血スライド3枚(制限)＋問診法 (S. 57. 4～S. 59. 3)	12,520	27.7	18	0.14 (0.23)	10 (56)	やや多	やや不良
5. 潜血スライド3枚(軽度制限)＋問診, 一部潜血再検(制限)法(S. 59. 4～							

S. 52～59年，阪大微研病院外科

言っています。しかし，癌の20%以上が見逃されるので毎年この検査をくり返すことが肝要であるとしています。西ドイツでは，1977年から国の健診プログラムの一つにこの便潜血テストが加えられ，45才以上の約600万人が受けるようになったそうです。もっとも，規模が大きすぎて全体の成績は把握不可能とかで，約3万人についての報告をしていました。

私たちはシンポジウムで，昭和59年春まで2年間行って来た**表1**の第4に示す方法での成績を中心に発表しました。潜血スライドを制限食下に3日法で検査し，問診と併せてスクリーニングした結果，12,520人の受検者から18人の癌を見つけました。使っているスライドの感度が西欧のヘモカルトの約2倍あり，癌はまず見逃していない自信があります。ドイツのグナウク博士からは，日本でこれだけの正確な集検を実施したことに対し賛辞を受け，ただ要精検率がやゝ高すぎるのではないかとの批判もされました。この点は，私たちも気にしている所で，次回詳しく述べたいと思いますが，第5次の現集検ではこの精検率を下げる工夫をし，実施中です。

乳がん

この病気も欧米で非常に多いもので，シンポジウムに数題の発表がありました。日本からは教室と東北大学の2題が行われました。教室では先代の芝教授の時代に始めて，15年以上にわたり約7万人から100名余の乳がんを見つけた成績を太田先生が発表しましたが，座長をしていたアメリカのストラックス博士から，なぜ日本ではスクリーニングにX線乳房撮影を使わぬかとの質問を受けました。多くの国では触診と同時にX線検査をしているのです。予想はしていたものの，冷汗いっぱいで受け答えしましたが，シンポジウムが終って，この世界の第一人者から励ましの言葉をかけられ，握手して別れました。

このように教室で永年積み重ねて来た二つの集団検診の努力の結晶を，国際学会で発表したことによって，世界のその道の専門家に知らせることができ，本では知っていても，話したこともない権威者と親しくでき，はるばるウィーンにまでやって来た喜びをかみしめたものです。